

# 荒野における避け所の確立

年表	
年代	重要な出来事
1847.8	ブリガム・ヤングと使徒たちが、ソルトレークからウィンタークォーターズへ向かう
1847.9 10	10隊の聖徒たちがソルトレーク盆地へ到着する
1848.5 6	干ばつやクリケットの害に苦しむ聖徒たちが、かもめの奇跡によって救われる
1848.9	ブリガム・ヤングと教会指導者たちがソルトレーク盆地へ戻る
1848 1849冬	入植を始めたばかりの聖徒たちを厳しい天候が襲う
1849.2	新たに4人の使徒が召され、国外での伝道が始まる
1849秋	永続的移住基金制度が定められる

1847年の開拓者の隊	
隊	人数
ブリガム・ヤング	148
ミシシッピ	47
モルモン大隊	210
ダニエル・スペンサー	204
パーリー・P・ブラット	198
アブラハム・O・スムート	139
チャールズ・C・リッチ	130
ジョージ・B・ウォレス	198
エドワード・ハンター	155
ジョセフ・ホーン	197
ジョセフ・B・ノーブル	171
ウィラード・スノー	148
ジェデダイア・M・グラント	150
総数	2,095

ソルトレーク盆地に到着してわずか4日後に、ブリガム・ヤングは開拓者たちに「サンフランシスコ湾からハドソン湾までをくまなく知り尽くしたいと考えていること、またこの民がアメリカ全地にインディアンの各部族とつながりを持つようになる」<sup>1</sup>ということを話した。ヤング大管長はこの地域をデゼルトと名付けた。それは蜜蜂を意味する、『モルモン書』の中に出てくる言葉である（エテル2：3参照）。預言者は数々の新しい入植地を活動拠点にしたいと考えていた。聖徒たちは実質的に、広大なグレートベースンにおける唯一の白人入植者であった。グレートベースンと呼ばれた地域はテキサス州に匹敵する広さで、東はロッキー山脈、西はシエラネバダ山脈、北はコロンビア川の分水流域、南側はコロラド川まで達する地域であった。この地域はどちらかと言えば隔絶された乾燥地帯で、樹木や生き物の少ない所であった。聖徒たちは、この地に入植するにはかなりの信仰と最大限の努力が必要なことを理解したが、神の助けがあれば成功できると信じていた。

## ソルトレーク盆地での最初の年

1847年8月、ブリガム・ヤング、使徒、そして約100人の聖徒たちが、ソルトレーク盆地をたち、ネブラスカ州のウィンタークォーターズを目指した。それとちょうど同じころに、10の隊に編成された約150人の聖徒がソルトレーク盆地へ向けて大平原を西へ進んでいた。現在の西ワイオミングで、教会指導者たちはこの開拓者たちに出会い非常に喜んだ。喜びを分かち合った後、ヤング大管長の隊は再び東へ進み、一方、西へ進む隊も旅を続け、彼らは9月と10月の間にソルトレーク盆地へ到着した。

家族全員でやって来た聖徒たちにとって大平原の横断は困難な旅であった。多くの人々がその困難な旅に耐えられず、平原の中で死んでいった。第3隊の隊長だった七十人第一評議会のジェデダイア・M・グラントは妻のキャロラインと生まれたばかりの娘マーガレットを、ほかの多勢の人々と同じように、スウィートウォーター川のコレラで亡くしている。キャロラインは娘が死んだ4日後にその後を追うように亡くなった。彼女は死ぬ前に、自分たちのなきがらをソルトレーク盆地に葬るようにと求めたが、ジェデダイアはやむを得ず娘の遺体を地面を浅く掘って作った墓に入れ、その後ソルトレーク盆地まで旅を続けてそこに妻を埋葬した。後に彼は友人のジョセフ・ベイツ・ノーブルとマーガレットの遺体を掘り起こそうとワイオミングの平原まで戻ったが、すでにおおかみに荒らされた後だった。

しかし二人がそこへ到着する前に、神の御霊はすでに彼に慰めを与えていた。グラント長老は友人にそのことを打ち明けて話した。「ベイツ、神はそのことをわたしに明らかにしてくださった。妻と娘と一緒にいるパラダイスの喜びが今晚わたしに臨んだように思う。二人は何か賢明な目的があって、わたしや君が置かれているこ



ジェデダイア・モルガン・グラント  
(1816 - 1856年)。教会の偉大な宣教師  
の一人。シオンの陣営に参加。カートランド  
神殿で働き、ノーブー時代に七十人の7人の  
会長の一人として召される。

彼はソルトレーク盆地へ向けて平原を進  
む聖徒たちを助け、ソルトレーク・シティ  
ーの初代市長となる。晩年の最後の2年は、  
ブリガム・ヤング大管長の第二副管長とし  
て仕えた。

の世の苦しみから解放されたのだ。二人はわたしたちが地上で味わえるよりもはる  
かに大きな幸福を味わっている。」約束を果たせなかったことを悲しみながら、二人  
はソルトレークへ戻った。<sup>2</sup>

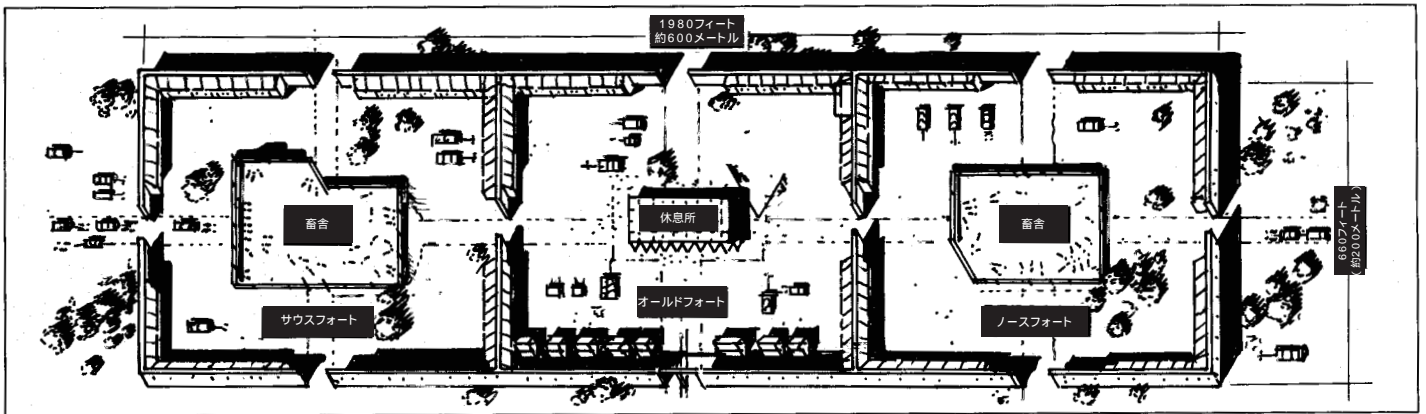
何年か後に、ジェデダイアは霊界にいる妻と娘を見ることを許された。グラント  
長老が亡くなる少し前に、ヒーバー・C・キンボール副管長は彼に祝福を与えた。そ  
のときグラント長老は、彼が受けた示現について語った。「彼は霊界に集った義人  
を見た。彼らの中には悪霊はいなかった。彼は自分の妻を見た。彼女は彼のところへ  
来た最初の人だった。彼は多くの知人を見た。しかし、妻のキャロライン以外には  
だれとも言葉を交わさなかった。キャロラインがジェデダイアのところへ来たので  
ある。彼は、妻は美しく、彼女が平原で亡くなった小さな子供を抱いていたと話し  
ている。彼女は彼にこう話した。『あなた、これがあのマーガレットよ。おかみが  
食べてしまったことは御存じですね。でもこの子には何の害もありませんでした。  
ここなら彼女に何の心配もないわ。』」<sup>3</sup>

チャールズ・C・リッチとジョン・ヤングは前の年にウィンタークォーターズで組  
織したのと同じような高等市議会を組織した。この市議会の監督の指揮下、とりで  
に10エーカー（約4ヘクタール）の区画が二つ付け加えられ、450の丸太小屋が建設  
された。そしてとりでの周囲に巡らした日干しれんが造りの壁が完成した。市の周  
辺には家畜を管理するための柵さくが作られ、多くの道路や橋も作られた。5,133エカ  
ー（約2,000ヘクタール）の広大な土地が耕され、872エーカー（約350ヘクタール）  
の土地に冬小麦の植え付けが行われた。ジェームズ・ブラウン大尉がモルモン大隊  
への支払い約5,000ドルを持ってカリフォルニアから到着すると、市議会はあるグル  
ープにその金の一部を持って南カリフォルニアへ行き、牛、ラバ、小麦、そのほか  
様々な作物の種子を購入する割り当てを与えた。また高等市議会は、ソルトレーク  
から北へ35マイル（約56キロ）の所にあるオグデン川のマイルズ・グッドイヤー牧  
場と交易場の購入に1,950ドルを支出することを承認した。それはその広大で前途有  
望な地域への入植から障害の芽を取り除くためであった。<sup>4</sup>

ソルトレーク盆地にいたのは聖徒たちだけではなかった。1847年現在でグレート  
ベースン全体に約1万2,000人のアメリカインディアンがいたが、そのうちの一部がソ  
ルトレーク盆地に住んでいた。秋にユートインディアンの一団がとりでにやって来  
た。彼らの一人が、戦闘で生け捕りにした二人のインディアンの子供を売りたいと  
申し出た。聖徒たちがその申し出に逡巡しゅんじゆんすると、それを言い出したインディアンは  
二人の子供を殺すと脅してきた。改めて拒絶すると、一人の子供が殺された。そこ  
でブリガム・ヤングの義理の兄弟であったチャールズ・デッカーがもう一人の女  
の子を買い取り、ルーシー・デッカー・ヤングにその養育を頼んで預けた。サリーと  
名付けられたその少女は後にビーハイブハウスの料理長となり、ポーバント・ユ  
ート族しゅうちやうの酋長カノシュと結婚した。<sup>5</sup>

盆地で迎えた最初の冬は温和な気候であったが、オールドフォートには数多くの  
苦痛の種があった。おかみ、きつね、その他の動物たちが絶えず遠ぼえの声を上  
げたり侵入して来たりして、人々を悩ませていたのである。ある夜、ロレンゾ・ダ  
ウ・ヤングはその一帯にストリキニーネ（訳注：神経刺激剤として用いられるが、  
甚だしい毒性を持つ物質）をまいておいた。そして朝になって、14匹の白いおか

## 荒野における避け所の確立



オールドフォートは1847年の8月に建設され、神殿のあるブロックから南へ3ブロック、西へ3ブロックの所にあった。後に、さらに増える移住者を収容するために2区画が付け加えられ、それぞれノースフォート、サウスフォートと呼ばれた。

みの死体を見つけた。ねずみの群れも開拓者たちを悩ませた。ねずみ捕りの一つの方法として、水を入れたバケツのへりに油を塗った板を少し傾斜させた状態で載せておくというやり方があった。そうしておく、油をなめようとして板の上に来たねずみがバケツの中に落ちておぼれるという仕掛けだった。そのようなわけで、とりの中では猫が最も貴重な財産だったのである。

3月と4月には、激しい春の雪と雨が盆地を見舞った。不運なことに、聖徒たちはそのようなことが起こるとは考えてもいなかった。彼らの家の屋根は芝土で覆ったもので、ひどい雨漏りとなった。彼らは食糧を部屋の真ん中に集めて、インディアンたちから得たバッファローの毛皮で守った。「主婦が傘をさしながら家事をするという光景は珍しいものではありませんでした。晴れ上がった日のとりではとてもおかしい様相を呈していました。どこを見ても、様々な種類の寝具や衣服が干しに出されているのです。」<sup>6</sup>

1848年の春には、食糧や衣類がかなり不足してきた。聖徒の多くは靴や適当な服がなく、動物の毛皮でモカシン（訳注：インディアンが履いていた柔らかい革靴）や服を作っていたが、それらのものも配給制になっていた。一人の人間に1日当たり配給される小麦粉は0.5ポンド（約200グラム強）の量に制限されていた。彼らはまた、からす、あざみの芽、樹皮、植物の根、セゴユリの球根なども食べた。

ブリディ・ミックスは数か月間家族が満足のいく食事をできなかったときに、どのようにして食べ物を探したかを生き生きと描いている。「わたしは時々ジョーダン川を1マイル（約1.6キロ）ほど上った所にある野生のばらの自生地に行き、その実を取って豚がむさぼるように食べた。たかやからすを撃って食べたこともある。味は良かった。また湿地のくぼ地を探し、そこにはまり込んだ家畜の死骸を見つけ、食べられる肉の部分をそぎ落とし、実際に食べたこともあった。おおかみの肉もよく食べたが、味は悪くなかった。木製のシャベルを幾つか作って、それでセゴユリを掘ったこともあるが、必要な量を得ることはできなかった。」彼は特にあざみの根を掘ることに熱を入れて働いた。「わたしはよく鍬と袋を持って、夜明けを待って出かけた。あざみの根が採れる所まで6マイル（約9.6キロ）は歩いたと思う。そして家に帰る時刻までに1ブッシェル（約35リットル）、時にはそれ以上のあざみの根を手に入れたものである。そしてよく、それを生で食べたものだった。わたしはその仕事を続けて、疲れ果てると腰を下ろしてあざみの根を食べ、それからまた掘り始めた。」<sup>7</sup>



現在、ユタ州花とされているセゴユリ





ソルトレーク・シティのテンブルスクウェアに立つかもめの記念碑は、ブリガム・ヤングの孫マホニー・M・ヤングが立案製作したものである。1913年10月1日に、ジョセフ・F・スミス大管長によって除幕式が行われた。現在、かもめはユタ州の州鳥となっている。

このような困難な状況にあったために、開拓者たちは当然のことながら作物の収穫を楽しみに待ち望んでいた。ところが春の遅霜によって小麦や野菜の多くがだめになってしまったのである。そして5月と6月の干ばつはさらに作物の被害を大きくした。さらに悪いことには、クリケット（訳注：いなごのような田畑を食い荒らす、当時大量発生した新種の黒い大型の昆虫。こおろぎに似ているところから、「ロッキーマウンテンのこおろぎ」と呼ばれたりする。「モルモンクリケット」）の群れが山すそから下りて来て、残った作物を食い荒らし始めたのである。男、女、そして子供たちまでが棒やシャベル、ほうき、麻布の袋を持って、その害虫たちと戦った。火を使い、さらには溝を掘ってクリケットをおぼれさせようとまでしたが、その激しい攻撃を止めることはできなかった。約2週間にわたって、彼らは戦い、助けを祈り求めた。作物の収穫ができないのでは入植地が立ち行かなくなり、その年に移住を予定していた2,000人以上の聖徒たちの食糧が用意できなくなることを意味していた。

ようやく安息日に、チャールズ・C・リッチの説教中、グレートソルトレークからかもめが飛んで来て、害虫たちをむさぼるように食べ始めたのである。「かもめたちはクリケットをついばむと、やがてそれを吐き出し、また別のものを食べては吐き出すということを繰り返した」とプリディ・ミークスは記録している。かもめたちは、クリケットがほとんど姿を消すようになるまで、2週間以上その攻撃を続けた。ミークスは「この出来事によってわたしたちの気持ちはかなり良い方向へ転じた」と述べている。<sup>1</sup> 作物の多くが守られた。現在、かもめはユタ州の州鳥とされ、テンブルスクウェアにはかもめの記念碑が立っている。

聖徒たちは夏の間、残った作物を大切に育て、8月10日には収穫祭を行った。パリー・P・プラットはそのときの様子を次のように描いている。「人々から見えるように、小麦、ライ麦、大麦、オート麦などの作物の束が柱の上に掲げられ、祈り、感謝、祝いの言葉が述べられ、歌、話、楽器の演奏、ダンスも行われ、人々の顔には笑いがあふれ、心には喜びが満ちていた。その日は、この盆地に住む人々にとってすばらしい日であり、苦しみの中にアメリカ内陸の荒地を贖う最初の努力の結果を熱心に待ち望んできた人々が夢に描いていた日であった。彼らは当時は人々に知られることのない寂しい場所を『バラのように、さかんに花咲』かせるために働いたのである。」<sup>9</sup>

またこの入植者たちは、ブリガム・ヤングやほかの指導者たちを含む多くの聖徒たちが戻って来るのを首を長くして待っていた。彼らは9月に盆地に到着した。1848年が暮れる前にモルモン大隊の隊員を含む約3,000人の聖徒たちが盆地に着いた。今やノーブーを逃れた人々の約4分の1が西部の新しい避け所に来ていたのである。再びデゼレトの地に來たブリガム・ヤングはアイオワにいた人々に手紙を書いた。彼はその手紙の中で、聖徒たちがすでに「避け所、聖徒の霊が休まる地、安全に住める場所」を見いだしたことを熱っぽく書き送った。一度ならず自分たちの住まいを追い出された人々にとって、それはうれしい知らせであった。またブリガム・ヤングは「神の御名の誉れと栄光のために再び神殿を建てる」と断言していた。<sup>10</sup>

## デゼレト暫定州

盆地で迎えた最初の年に、高等市議会は法律の草案を作り、税制を決め、土地の

## 荒野における避け所の確立

分配、水利権や木材の伐採権を定め、墓地を造り、刑事犯に対する刑罰や罰金も定めた。1848年の秋に大管長会が到着すると、人口が増え続ける入植地の行政上の責任は指導的な立場にある約50人の神権者から成る中央評議会に移された。中央評議会は大管長会の管理を受け、週に1度、ヒーバー・C・キンボールの自宅で集会を持った。末日聖徒は霊的なことであり、経済的なことであり、政治的なことであり、神の王国の事柄はすべて一つであると考えていたので、教会と政治は分離していなかった。

この暫定政府は拡大する市の町作りを続けた。1848年の秋から冬にかけて、ブリガム・ヤングとヒーバー・C・キンボールの指導の下に適切な管理能力を持つ申請者に対して土地の配分が行われた。市全体が19のワードに分けられ、各ワードは9ブロック四方の大きさであった。各ワードを管理する監督が置かれ、その管理の下に柵<sup>かんがい</sup>や灌漑用水網が作られ、用水路の土手沿いに木が植えられた。

1848年の秋に行われた農地の配分は、ヤング大管長の構想に基づいて行われた。その構想とは、農地は先に入植した者が独占するというものではなく、入植地全体の利益を考え、最も生産的な利用法を取るというものであった。入植地全体にとって重要な資源である水や材木については私的な所有権は認められなかった。監督の指導の下に、人々は灌漑用水路や盆地に通じる道路などを開く工事に携わった。個々の家族はそれらの工事や維持に投入した労働量に応じて、水や材木を利用する権利を与えられた。土地や水、材木などの使用を巡る問題は、神権指導者が調停した。土地、水、材木などの利用に関しては、聖徒たちの間にかかなりの協力関係があったが、次第に私的な事業体がこれらの資源の統制を行うようになった。

1849年に着工し、1850年に完成した市議会の建物は、ユタ州最初の公的な建築物であった。その機能は歳月の流れとともに様々に変わった。準州の議事堂、準州の公立図書館、エンダウメント用の建物などとして用いられ、長年にわたりデゼルト大学の校舎としても用いられた。最終的には1883年に火事で消失した。





ユタ州で最初の金貨は1849年9月に鑄造された。後に鑄造用のるつぼが壊れ、東部から資材を取り寄せるまで貨幣鑄造ができなくなった。そのときに紙幣を発行することが決められたのである。

また公共工事は、特に聖徒たちの協力によって推進された。この部門を統轄する責任を受けていたのがダニエル・H・ウエルズであった。公共工事としてまず始められたのは、神殿のブロックの周囲に巡らす壁、什分の一の事務所、市議会館（公的な集会や政治集会などに用いられた）、日干しれんが造りの小さな教会本部、市の北部の温泉地の公共浴場、武器庫、テンプルスクウェア内の仮の集会場などであった。さらに、皮なめし工場、製粉所、製材所、鑄造所などが官民の協力関係によって建設された。

盆地で経済的取引のための手段として最初に用いられたのは、サクラメント近郊における金の発見に関与したモルモン大隊の隊員たちがカリフォルニアから持って来た、数千ドルに等しい価値のある砂金であった。後に大管長会は、デゼレト経済の振興のためにさらに多くの貴金属を得るために、数名の教会員を「ゴールドミッション」としてカリフォルニアへ派遣した。砂金は貨幣に鑄造された。教会の金の備蓄を裏付けとして、紙幣も用いられた。<sup>11</sup>

メキシコ戦争の終結と1848年2月2日のグォドループ・イダルゴ条約の締結によって、聖徒たちが建設を始めたばかりの入植地はアメリカの一部となった。この条約によって合衆国は、現在のカリフォルニア、ネバダ、ユタ、またニューメキシコとアリゾナの大半、ワイオミングとコロラドの一部を領土とした。自分たちの入植地がアメリカ合衆国の一部になったことを知った教会指導者は、その地域を州にする計画を立て始めた。1849年初頭、中央評議会はブリガム・ヤングを知事としてデゼレト暫定州を正式に発足させた。ウィラード・リチャーズが州務長官、ヒーバー・C・キンボールが裁判所長官、ニューエル・K・ホイットニーとジョン・テラーが陪席判事、ダニエル・H・ウエルズが検事総長の任に就いた。

デゼレト暫定州は2年にわたってグレートベースン内の行政府の役割を果たした。暫定州は幾つかの郡に分けられ、天然資源に対する権利の割り当て、交易や商業の統制、正規の州軍としてのノーブー隊の確立などを行い、通常が行政府が持つあらゆる機能を果たした。「州議会」はブリガム・ヤングが選び、有権者によって承認された人々によって構成されていた。この暫定州政府は、合衆国議会が1850年9月に正式にユタ準州を定めるまで円滑に、称賛に値する働きを続けた。

### 「わたしたちはここにとどまる」

このように聖徒たちに対する行政的な管理は効果的に行われたが、デゼレトに強固な避け所を確立するには幾つか困難な問題が横たわっていた。1848年から49年にかけての冬はその前の冬に比べて気候が厳しく、人々の間に深刻な事態を引き起こした。何度も雪が降り、冬中積雪が地面を覆って、家畜の飼料の確保が困難になった。また山々の雪が深く、木材を集める仕事が困難を極めた。極度の寒さとすさまじいまでの強風は入植者たちの生活をひどく惨めなものにした。<sup>12</sup>

再び食糧事情が悪くなり、人々はおおかみ、たか、からす、犬などを食べ、時には動物の死骸を食べることさえあった。市議会はなけなしの食糧を食い荒らす動物を駆除するための競技会を開いた。この狩りによって多くの害獣が駆除された。また自発的に物資の配給と地域ごとの貯蔵制度も定められた。余分な食糧を持つ人々はそれを貧しい人々に分け与えるため、監督に託すように求められた。



## 荒野における避け所の確立

寒さの厳しい冬、また慢性的な飢え、前の年の乏しい収穫、いわゆる「カリフォルニア熱」(訳注：カリフォルニアにおける金鉱発見で人々の間に広まった一獲千金を目指す風潮)の誘惑などによって一部に不満が起こり、幌馬車に荷を積んで、春にはユタを出発する準備をする人々もいた。このような試練の時に、ヒーバー・C・キンボール副管長は靈感を受けて次のように預言した。「皆さん、決して心配しないように。1年とたたないうちに、セントルイスで買うよりも安い値段で衣類やそのほかすべてのものが豊富に出回るようになります。」<sup>13</sup>

ブリガム・ヤング大管長も聖徒たちをこう励ました。「神はこの地を聖徒の集合地と定められました。ここにいれば、金鉱へ行くよりも良い結果を得ることができるでしょう。……わたしたちはこれまで最悪の状態から、よりましな状態へ、そしてよりましな状態から、何とか忍耐できる状態へと移ってきて、今ここにいます。そしてわたしたちはここにとどまるでしょう。……聖徒がここに集い、この地を所有するまでに強くなるにつれ、神は気候を和らげてくださり、わたしたちはこの地に至高の神のために市と神殿を建設するようになるでしょう。わたしたちは入植地を東西南北へ広げ、何百という町や市を作っていきます。そして何千という聖徒たちが地上のもろもろの国から集合することでしょう。……わたしたちは地上で見だし得る中で最高の気候、最良の水、きれいな空気を与えられています。ここより以上に健康的な気候はほかにありません。金銀、地の豊かな鉱物について言えば、この国に匹敵する国はほかにありません。でもそれは放っておきましょう。それらを探し求めることはほかの人々に任せ、わたしたちは土を耕しましょう。」<sup>14</sup>

多くの聖徒たちはその声に忠実に従い、作物の種をまいた。夏が来ると、神の預言者の言葉の正しさが立証された。主は気候を和らげ、豊かな収穫を授けてくださったのである。すでに盆地に入っていた約5,000人の聖徒と、夏の間に移住して来た1,400人の必要を満たすに十分な量であった。さらに1849年と1850年にソルトレーク・シティーを通過した1万人から1万5,000人と見積もられる金鉱探しの人々が、聖徒に思いがけない経済的利益をもたらした。カリフォルニア州へ様々な物資を運ぶために組織された商事会社の面々は、ソルトレーク・シティーへ到着したときに、海路運ばれた食糧、衣類など様々な道具類がすでに西海岸の市場へ到着しているということを知らされた。そのために彼らはカリフォルニアで手ひどい損失をするよりはまだましと考えて、手持ちの商品を聖徒たちに格安の値段で売却した。陸路を進んで来た彼らの幌馬車は修理や手入れが必要で、モルモンのかじ職人、馬車職人、牛馬の御者、洗濯職人、製粉職人などに就労の機会を与えた。聖徒たちはノースブラット川、グリーン川、ベア川などの上流の渡河地点に渡し場を作り、それらはカリフォルニアへ向かう幌馬車隊によって利用された。

カリフォルニアの採金地域へ早く着くために荷物を軽くしようとした人々が途中で捨てた貴重な物資を集めるために、ソルトレークから空の幌馬車で派遣された人々がいた。ジョン・D・リーは幾日かを使って自分の家族のためのストーブを探した。最後に彼は「自分の好みのストーブを見つけた。お金を出して買えば50ドル以上はするという大型の高級品であった。帰路彼は火薬、銃弾、調理器具、たばこ、釘、様々な道具類、ベーコン、コーヒー、砂糖、衣類を詰めたトランク、斧、馬具<sup>おの</sup>などを集め始めた。」<sup>15</sup> このように歴史上有名な1849年のゴールドラッシュは、聖徒

## 時満ちる時代の教会歴史

たちがソルトレーク盆地で生き残るうえで直接的な効果をもたらしたのであった。

### 初期の調整探検と入植

デゼレトにおける最初の2年間の聖徒たちのおもな働きは開拓事業の本拠地を確立することに向けられたが、教会の指導者たちはほかにも入植地となる所を探していた。幾つかの調査隊が、水源地の有無、土壌の肥沃度、木材やその他の建築資材の入手の可否、周辺山岳地帯の標高、鉱床の有無などを調べた。

1847年の7月と8月に、パイオニア商会から調査員が派遣され、ソルトレーク盆地の南方の地域、またベア川沿いの北方の地域、キャッシュ盆地へ向かう東方の地域の探検が行われた。1847年の秋にはモルモンのグループによって、カリフォルニアへ向かう二つのルートが踏破された。ジェームズ・ブラウン大尉が北方の進路を取り、サミュエル・ブラナンをサンフランシスコにあるその入植地まで送ったのである。またモルモン大隊の前任大尉であるジェファーソン・ハントが、牛やその他の必要な物資を得るために18名を率いて南カリフォルニアへ向かった。ハントや隊員たちは、命をつなぐために自分たちの馬を食べることまで余儀なくされたが、オールドスパニッシュトレイル経由でチノーランチョへ無事到着した。

1847年12月に、パーリー・P・プラットは大きな淡水湖ユタ湖を目指し、探検隊を率いて南へ進んだ。彼らはソルトレーク盆地西部のオキール山地を通して帰路に就く前の2日間、船を出して網で魚を取り、ユタ湖とユタ盆地を探検した。彼らは1週間にわたる調査を終える前に、シダー盆地とトゥエラ盆地、そしてグレートソルトレーク南端の探検も行った。

開拓者たちが到着してから1年の間に、ソルトレーク盆地南部と、後にデイビーズ郡、ウィーバー郡と呼ばれる北部地域に小さな町々が開かれた。そのような入植地のうち、ジェームズ・ブラウンにちなんでブラウンズビルと名付けられた町は、その後発展してユタ州で2番目に大きな市となった。（後に、毛皮商人ピーター・スカーン・オグデンを記念してオグデンと呼ばれるようになる。）ブラウンズビルを確立するために、ブラウン家族以外の人々もその地の入植に参加した。彼らはカリフォルニアから持って来た種で、小麦、とうもろこし、キャベツ、かぶ、じゃがいも、すいかの栽培に成功した。彼らはまた約25頭の牛で酪農を行い、この地域でチーズの製造を行った最初のモルモンとなった。これは、ソルトレーク盆地の聖徒たちが1848年から49年にかけての飢えの時期を乗り切る助けとなった。1849年、ブリガム・ヤングは急速に成長するこの入植地を訪れ、さらにローリン・ファーを派遣し、この地域の教会と行政に関するすべての責任を担当させた。ローリン・ファーはオグデンの初代市長となり、またウィーバーステーク最初の会長となった。そして20年にわたりその二つの職を務めた。

昔からその地に住むユーツインディアンにちなんで名付けられたユタ盆地は、ソルトレーク盆地の南に位置する肥沃で魅力的な地域で、当然のことながら入植地の建設が考えられた。当初、教会の指導者たちはこの盆地を、ソルトレーク・シティの聖徒たちのための家畜の放牧地、また魚の供給地として用いることを考えていたが、インディアンとの間に予想される問題を考慮して、恒久的な防備を固めた入植地を建設することになった。総勢約150名の33家族が、ジョン・S・ヒグビーを指



## 荒野における避け所の確立



ローリン・ファー（1820 - 1909年）。11歳のときに家族とともに教会に入り、ライマン・E・ジョンソンからバプテスマを受け、オーソン・プラットから確認の儀式を受けた。彼は長年にわたり、ウィーバーステークの会長とオグデン市長の職を務めた。

フォートユタは、フランス人のわな猟師エテヌ・プロボットにちなんで、フォートプロボとも呼ばれた。

導者としてプロボ川に到着したのは1849年4月1日であった。彼らはユタ湖の東1.5マイル（約2.5キロ）ほどの地点にフォートユタというとりでを築き、肥沃な川沿いの低地の耕作を始めた。ブリガム・ヤングは9月にフォートユタを訪れ、とりでをさらに東寄りのより高い場所に移動するように勧めた。

この新しい場所はプロボ市の中核になった。1849年から50年にかけての冬に、ユーツインディアンが新参の入植者たちに攻撃を仕掛けてきた。そのために、プロボの住民を守るためにノーブー隊が召集された。フォートユタの戦いと呼ばれる2日に及ぶ衝突で、40人のインディアンと一人の入植者が命を落とし、数名の負傷者が出た。<sup>16</sup> この衝突の結果、ユタ盆地におけるインディアンの敵対行為はやみ、1850年と1851年には、リーハイ、アルパイン、アメリカンフォーク、プレザントグローブ、スプリングビル、スパニッシュフォーク、セーレム、サンタキン、ペイソンなどを含む数々の入植地を開くことが可能になった。この一連の入植地は山岳地帯の流水を活用し、それぞれの外縁部にある農地や牧草地で境を接するように配置し、危急の際にはすべての入植者が集結できるようにした。プロボはその地域のステーキの中心地となり、郡庁が置かれた。

ソルトレーク盆地西部のトゥエラ盆地への入植は1849年に行われた。その年の11月に、オハイオ州における最初の改宗者の一人、アイザック・モーリーが225人を率いて、ソルトレーク・シティーの南約100マイル（約160キロ）にあるサンピート盆地に入植した。彼らは、後にマンタイ神殿が建てられた丘陵地に横穴を掘り、そこで寒く厳しい冬を過ごした。翌年、モーリー長老とその同行者たちは、自分たち



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

の近くの地に住むように勧めてくれたユーツインディアンの酋長ワカラおよび彼の部族たちとの間に友好的な関係を築いた。

1849年11月23日には、ソルトレーク盆地南部にさらに入植地を開くための候補地を選ぶ目的で、パーリー・P・プラットを長とする、50人から成る調査隊が組織された。4日後に彼らは57軒の丸太小屋を誇るプロボの立派な入植地を訪れた。この隊は、全行程を通して詳細な調査を行った。彼らはジュアブ盆地、サンピート盆地とさらに南下を続け、わずか12日前に入植が開始されたマンタイに到着した。12月10日、ソルトレーク・シティーから南200マイル（約160キロ）ほどのセビーア川で彼らの温度計は零下29度を記録した。さらに100マイル（約160キロ）進んだところで隊の一部がグレートベースンの端を横切り、後にユタのディクシーと呼ばれる地域へ入ったが、そこで気候や地形に大きな変化があることを彼らは知った。そして一行は

## 時満ちる時代の教会歴史

新年までに現在のセントジョージに到着したのである。

インディアンのガイドたちや村人がそこから南は荒涼とした恐ろしい地であると告げたので、彼らは北へ戻ることに決定した。マウンテンメドーズやポーバント盆地を通過して戻る途中、彼らは大雪のためにチョーククリーク（現在のフィルモア）での足止めを余儀なくされた。そして隊の半分がプロボまで進み、残りの半分は春までチョーククリークにとどまることになった。この決定がなされたのは、越冬のための物資が隊員の半数の分しかなかったからである。ある朝、プロボを目指した兄弟たちの隊は、夜の間に積もった雪の中に完全にうずもれた状態になっていた。プラット長老は起き上がると大きな声でまだ眠っている兄弟たちを起こした。「わたしはラッパのような声を上げ、彼らに起きるように命令した。降り積もった雪の山が震えたかと思うと、その白い墓が開かれ、全員が出て来た。わたしたちはこれを復活のキャンプと呼んだ。」<sup>17</sup>

## シオンへの集合

この初期の探検と入植の時期に、大管長会はミズーリ川近くのアイオワ州の野营地から残りの聖徒たちを集合させる計画を練り上げていた。アイオワに残っていた聖徒たちの多くは非常に貧しい人々であった。

1848年に大管長会は聖徒たちの指導に当たらせるためにオーソン・ハイドをアイオワ州のケインズビルにとどませた。それまでの間に、ポタワトミー郡には約30か所の入植地が開かれていた。農業や商工業が順調に行われ、学校も開設されていた。ハイド長老は1849年に『フロンティアガーディアン』(*Frontier Guardian*)という新聞を創刊し、1852年にユタの地に召されるまでの間に、約100回の号を発行した。この新聞はアイオワ州と東部にいる聖徒たちに、神の王国の進展についての情報を与えるためのものであった。

アイオワ州におけるモルモン最大の入植地ケインズビルには大平原横断のための集結地としての機能がかった。近くには教会がミズーリ川に築いた3つの渡し場があり、それらの渡し場はオレゴンやカリフォルニアへ向かう14万人の移住者にも利用されていた。ケインズビルで起きた最も喜ばしい出来事は、1848年10月にオリバー・カウドリが教会に戻って来たことであった。1848年11月12日に、オリバーは改めてバプテスマを受けた。しかし残念なことに、オリバーはソルトレーク盆地への集合がかなわないまま、病に倒れ、ミズーリ州リッチモンドにいる妻の家族を訪ねた折に亡くなった。1850年3月3日、彼は義父ピーター・ホイットマー・シニアの家で他界した。

1849年の豊かな収穫とゴールドラッシュでカリフォルニアへ向かう人々がもたらした経済の好転は、教会に集合促進への自信を強めさせた。集合を促さねばならない聖徒として、ミズーリ川流域の地にはまだ1万人が残留し、東部諸州全域に散在する支部には数百人、イギリスの教会には3万人の会員がいた。1849年の秋に、教会の指導者は永代移住基金制度を発足させた。この制度の目的は、ゼデレトにおいて献金を募り、それを用いてアイオワ州の野营地に集合していた貧しい聖徒たちに旅装を整えさせることにあった。ソルトレーク盆地に到着した後、移住者たちには公共事業での労力、あるいは金銭による返却が期待され、それによってこの移住基金制



オーソン・ハイドは1849年2月7日にアイオワ州ケインズビルで『フロンティアガーディアン』という新聞の発行を始めた。1852年この新聞の権利はジェイコブ・ドーソンに売却され、彼は紙名を『アイオワセンチネル』(*Iowa Sentinel*)と変えた。

荒野における避け所の確立

永続的移住基金組合を通してユタへ行く教  
会員たちが署名した書類。

48

**Perpetual Emigrating Fund Company,**  
ORGANIZED AT GREAT SALT LAKE CITY, DESERET, U.S.A., OCTOBER 2ND, 1837.

*Franklin B. Richards, Agent, Emigrant*

We, the undersigned, do hereby agree and bind ourselves to the PERPETUAL EMIGRATING FUND COMPANY, in the following conditions, viz:—

That, in consideration of the aforesaid Company emigrating or transporting us, and our necessary Luggage, from Great Britain to the Valley of the Great Salt Lake, according to the Rules of the Company, and the general instructions of their authorized Agents;

We do severally and jointly promise and bind ourselves to conform with, and obey the instructions of, the Agent appointed to superintend our passage thither: that we will receipt for our passages previous to arriving at the several ports of New Orleans, St. Louis, and Kanesville;

And that, on our arrival in the Great Salt Lake Valley, we will hold ourselves, our thine, and our heirs, subject to the appropriation of the PERPETUAL EMIGRATING FUND COMPANY, until the full cost of our emigration is paid with interest if required.

NAME	AGE	NAME	AGE
<i>John Tamm</i>	<i>42</i>		
<i>Elizabeth Tamm</i>	<i>45</i>		
<i>Emma Tamm</i>	<i>12</i>		
<i>Selina Tamm</i>	<i>6</i>		
<i>Lucy Ann Tamm</i>	<i>1</i>		

*January 1, 1842*

PERPETUAL EMIGRATING FUND COMPANY'S OFFICE,  
GREAT SALT LAKE CITY, UTAH TERRITORY,  
July 20 1850

ON DEMAND I promise to pay to the TREASURER of the PERPETUAL EMIGRATING FUND COMPANY, the sum of *One Thousand* as payment of IMMIGRATING EXPENSES, for bringing the following named persons, from *Great Britain* to G. S. L. City.

NAMES.  
*Rachel Knight*  
*Charles Knight*

*James Wright*

度は「永続的」に運用されることになっていた。永続的移住基金制度によるヨーロッパの聖徒たちへの援助は、ノーブーを追われた聖徒らの西部移住が終了した後、極力早い時点に開始された。

最初の年の秋に約6,000ドルの基金が調達され、エドワード・ハンター監督は教会の代表としてアイオワへ行き、多くの聖徒たちにシオンへの旅支度をさせるため、



## 時満ちる時代の教会歴史



エドワード・ハンター（1793 - 1883年）は1840年10月8日に、当時バレスチナへ向かう旅の途中にあったオーソン・ハイドからバプテスマを受けた。エドワード・ハンターは裕福な人物で、教会とその指導者に対して惜しみなく自分の財産を提供した。ブリガム・ヤングは1851年に、彼を教会の管理監督の責任に召した。

幌馬車、牛馬そのほかもろもろの物資を購入する責任を与えられた。1850年には約2,500人がデゼレトへ移住し、さらに1851年にも2,500人が援助を受けた。それでもなお、アイオワには約8,000人の聖徒たちが残っていた。その中にはウィルフォード・ウッドラフ長老の指示の下に東部の支部から集った人々や、はるばるとイギリスからやって来た何千人という聖徒たちもいた。

1851年の秋にエズラ・T・ベンソン長老とジェデダイア・M・グラント長老は、オーソン・ハイドを助けて、1852年には宿営地の聖徒たちをすべて移住させるようにとの任務を受けた。宿営地に残っていた人々に対して、大管長は次のように訴えた。「皆さんは何を待っているのでしょうか。ここへ来ないことについて何か適切な言い訳があるのでしょうか。そのようなものはありません。皆さんすべてが、わたしたちが開拓者としてこの地を見つけることから始めたときに比べればはるかに良い条件に恵まれているのです。馬や牛、それに食糧においても質量ともに恵まれています。皆さんは初めからそれほど恵まれているのです。……

……ですからわたしたちは至高者の聖徒である皆さんがボタワタミーや東部を離れ、次の秋にはわたしたちのところへ来るように望んでいます。」<sup>18</sup>

これにこたえて、多くの聖徒たちがアイオワ州の地や建物などを辺境地のアメリカ人に売却した。そして1852年に、それぞれが60台以上の幌馬車から成る21の隊がグレートベースンに移住したのである。将来の移住者を援助するために、最小限度の人員がミズーリ川沿いの地に残留した。

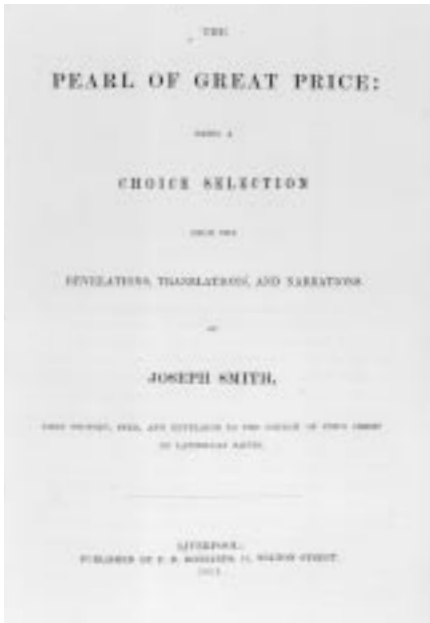
## 国外での発展

集合への意識の高揚とともに、大管長会は世界中の国々にイエス・キリストの福音を広める業にも改めて注意を向けた。その非常に重大な責任を与えられたのは、十二使徒定員会であった。（大管長会の組織とライマン・ワイトの背教によって）生じていた十二使徒定員会の4つの空席は、1849年2月にチャールズ・C・リッチ、ロレンゾ・スノー、エラスタス・スノー、フランクリン・D・リチャーズが召されたことによって満たされた。十二使徒の多くと、十二使徒の指示を受けた何人かの長老たちが、世界中の国々に福音のメッセージを伝える務めを与えられた。ジョン・テラーはフランスとドイツに、ロレンゾ・スノーはイタリアへ、エラスタス・スノーはスカンジナビア諸国へ、それぞれ幾人かの宣教師とともに派遣された。

1849年10月の総大会において、フランクリン・D・リチャーズをはじめとする人々がイギリスへの伝道に召された。リチャーズ長老は伝道部長として、オーソン・プラットの跡を継ぐことになった。イギリスにおける伝道活動は、1846年から47年にかけてのパーリー・P・プラット、オーソン・ハイド、ジョン・テラーの短い伝道期間後も大きな成功を収めていた。その後は、オーソン・スペンサー、そしてオーソン・プラットが引き続き伝道部の管理に当たっていた。1847年から1850年の間に何千もの人々が教会に改宗していた。プラット長老は、イギリスにおける永続的移住基金の最初の適用者となった、3,000名の教会員をアイオワ州ケインズビルへ移住させる仕事も統轄した。

フランクリン・D・リチャーズ長老がオーソン・プラットの後任として正式にイギリスの伝道部長になったのは、1851年1月1日であった。彼の優れた指導の下に、そ

## 荒野における避け所の確立



1851年版の『高価な真珠』のタイトルページ。

の後の17か月間にさらに何千もの人々が教会に加入し、その聖徒たちのシオンへの集合の準備も引き続き行う必要があった。オーソン・プラットとフランクリン・D・リチャーズは数多くの小冊子を発行し、それらは伝道活動の助けとなった。しかしそれらの中で最も重要なものは、預言者ジョセフ・スミスが受けた啓示や翻訳された聖典を一つに編集したものであった。イギリスの聖徒たちはそれまで、それらの啓示や記録を目にすることがなかった。リチャーズ長老はそれに『高価な真珠』という適切な名を付けた。1851年に発行されたその小冊子は、1880年に教会の標準聖典として受け入れられた同名の聖典の基となった。イギリスの聖徒たちが教会の力となって大きく貢献したことは明らかであった。19世紀中にロッキー山中のシオンに集合した多くの聖徒のうち、半数以上はイギリス出身者であった。

十二使徒会のほかの会員たちは、ヨーロッパ大陸の国々に福音を伝えた。ジョン・テラーは1849年と1850年の両年に、フランスとドイツにおける最初の伝道活動を管理した。1848年にヨーロッパに起きた一連の革命は大きな社会変動をもたらし、そのためにテラー長老と同僚たちはどの国においても見るべき成功を収めることができなかった。しかしフランス語とドイツ語の『モルモン書』が出版され、ドイツのハンブルクには教会の支部が設立された。ドイツではその後の数年間、散発的に伝道活動が行われた。

イタリアの伝道に召されたロレンゾ・スノー長老は1850年6月にピエモンテ地方に到着した。彼にはイタリア出身のジョセフ・トロントとイギリス人改宗者T・B・H・ステンハウスが同僚としてついてた。彼らはヴァルド派として知られるプロテスタントの間である程度の成功を収めたが、会員数において勝るカトリック教徒の中では成功を得ることができなかった。ロレンゾ・スノーは『モルモン書』をイタリア語に翻訳するための準備をし、最初の宣教師たちをマルタとインドに派遣した。1850年12月に、ステンハウス長老はスイスで福音を伝え始めた。1851年の2月にスノー長老は、スイスを福音伝道の地として奉献した。1850年代のスイスにおける伝道はゆっくりと、しかし着実に進展し、ヨーロッパにおける伝道部としてはイギリス、デンマークに次いで多くの改宗者を出した。

デンマークに福音を伝える責任は、十二使徒のエラスマス・スノー長老に与えられた。彼は1850年にデンマークに到着し、憲法によって強く保障された宗教の自由の下に、すぐに成功を収めることができた。多くの改宗者の中からスノー長老は、地元デンマーク出身の150名の宣教師を任命し、その宣教師たちはそれぞれに福音のメッセージを広める業を速めるのに貢献した。福音は、デンマークからノルウェー、スウェーデン、アイスランドへと急速に広められた。これらの国々ではデンマークほどの改宗者は出なかったが、スカンジナビア諸国全体ではその後の50年間に、シオンへの偉大な集合の業の中で何千人もの聖徒をアメリカへ送り出したのである。

海外への伝道の熱意が新たに高められたこの時期には、世界中の国々に福音を広めるために多くの勇気ある試みがなされたが、全体的に見ればわずかな成果を得るにとどまった。パーリー・P・プラットは太平洋地域の伝道活動を管理する任務を与えられ、中国、ハワイ、オーストラリア、ニュージーランドに宣教師を派遣した。1851年に彼はチリへ赴いたが、革命のために活動できない状況になってしまった。中国では太平天国の乱で、ホセア・スタウトの活動が妨げられた。オーストラリア

## 時満ちる時代の教会歴史

とニュージーランドではある程度の成果を得、1850年代にわずかながらソルトレーク・シティーへの移住者が出た。

太平洋地域で最も成功したのは、1850年に開設されたハワイ伝道部であった。ジョージ・Q・キャノンはヨーロッパ人やアメリカ人だけではなく、昔からその地の島々に住む人々に福音を広めるべきだと強く感じた。そして、キャノン長老と彼に従った兄弟たちはハワイ語を学んで、福音を受け入れる準備のできた数多くの人々を見いだしたのである。

1847年に続く何年かの間に、末日聖徒イエス・キリスト教会は西部に避け所を見だし、靈感あふれる指導者のもとに御業を大いに前進させた。荒涼とした大地を征服する事業を始め、開拓の核となる入植地を築き、何千人もの避難民をデゼレトに集合させ、勇敢にも福音を世界中の多くの国々に伝えたのである。

## 注

1. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1847年7月28日で引用, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー

2. カーター・E・グラント “Robbed by Wolves: A True Story” *Relief Society Magazine* 「おおかみに奪われて」『扶助協会誌』1928年7月号, 363 - 364で引用

3. ヒーバー・C・キンボール, *Journal of Discourses* 『説教集』4: 136で引用

4. B・H・ロバーツ, *A Comprehensive History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints Century One* 『末日聖徒イエス・キリスト教会概史 第1世紀』全6巻 (Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1930), 3: 476 - 477参照

5. ジョン・R・ヤング, *Memoirs of John R. Young, Utah Pioneer*, 1847 『ユタの開拓者ジョン・R・ヤングの思い出の記』1847年 (Salt Lake City: Deseret News, 1920), 62; ソロモン・F・キンボール “Our Pioneer Boys” *Improvement Era* 「開拓者の少年たち」『インブルーメント・エラ』1908年8月号, 734 - 735参照

6. M・イザベラ・ホーン “Pioneer Reminiscences” *Young Woman's Journal* 「開拓者の思い出話」『ヤングウーマンズ・ジャーナル』1902年7月号, 294

7. プリディ・ミークス “Journal of Priddy Meeks” 「プリディ・ミークスの日記」*Utah Historical Quarterly* 『ユタ州歴史季刊誌』1942年号, 163で引用

8. 「プリディ・ミークスの日記」164. ウィリアム・ハートリー “Mormons, Crickets, and Gulls: A New Look at an Old Story” 「モルモンとクリケットとかもめ 新しい視点から見た

昔の物語」『ユタ州歴史季刊誌』1970年夏季号, 224 - 239も参照

9. パーリー・P・ブラット編, *Autobiography of Parley P. Pratt* 『パーリー・P・ブラット自叙伝』モルモン名著シリーズ (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1985), 335

10. ジェームズ・R・クラーク編, *Messages of the First Presidency of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints* 『末日聖徒イエス・キリスト教会大管長会メッセージ』全6巻 (Salt Lake City: Bookcraft, 1965 - 75), 1: 341で引用

11. ユージン・エドワード・キャンベル “The Mormon Gold Mining Mission of 1849” *Brigham Young University Studies* 「1849年モルモンの金採掘ミッション」『ブリガム・ヤング大学紀要』1959年秋季 - 1960年冬季号, 23 - 24; レナード・J・アーリントン, *Great Basin Kingdom: An Economic History of the Latter-day Saints* 『グレートベースンの王国 末日聖徒の経済の歴史』1830 - 1900年 (Cambridge: Harvard University Press, 1958), 71 - 74参照

12. ブリガム・ヤング, ヒーバー・C・キンボール, ウィラード・リチャーズ, *Messages of the First Presidency* 『大管長会メッセージ』クラーク編, 1: 352参照

13. 『説教集』10:247

14. ジェームズ・S・ブラウン, *Giant of the Lord: Life of a Pioneer* 『主の巨人 ある開拓者の生涯』(Salt Lake City: Bookcraft, 1960), 132 - 133で引用

15. ワニータ・ブルックス, *John Doyle Lee: Zealot - Pioneer Builder - Scapegoat* 『ジョン・ドイル・リー: 狂信者, 開拓者, スケープゴート』(Glendale, Ca.: Arthur H. Clark Co., 1972),



## 荒野における避け所の確立

48 - 49

16. ピーター・ゴッドフレッドソン, *Indian Depredations in Utah* 『ユタ州におけるインディアンの略奪行為』(Salt Lake City: Merlin G. Christensen, 1969), 28 - 35参照.

17. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』 340

18. クラーク編 『大管長会メッセージ』 2 : 75 - 76で引用